

## 教育制度の革新

石原 純

政治に於ける新体制と共に、社会のあらゆる方面に於ては、今日頻りに新体制が称えられて、それが恰も一つの流行色を形づくっているように見える。かくて教育界も亦その例に洩れることなく、それぞれの公私の大学や専門学校などに於て、それが頻りに議せられているようであり、中には既に実行の緒についた処もあるように見受けられる。併しこれらの審議内容について、私は殆ど何も聞知していないので、ここでそれらについての批判を下すわけにゆかないが、それにしても大体から考察して、その傾向が聊か末梢に走り過ぎていてのではないかと思われなければならない。少しく酷評かも知れないが、一般には新体制なるものを甚だ安易に解して居り、時流に便乗していくらかの組織改革を行いさえすればそれで事は済むかの如くに見做している嫌いがあるばかりでなく、新体制を称えなければ時勢にとり残されるかの如くに感じて、ともかくも何等かの変更を企てるという有様でもある。之は必ずしも真実の新体制を把握し得ないはめに陥らないとも限らないので、この際に特に一層の慎重な考慮を必要とすべきことについて、敢て警告したいと思うのである。

慎重な考慮というのは、当面の教育界の問題に於て言えば、現時の教育制度が根本からして深い省察を加えられなくてはならないと云うことである。之をその儘放置しておいて、各学校内の多少の組織を変えたところで、それで新体制が行われ得るとするのは、そこに時流便乗的な安易性を見るに過ぎないと、我々は考えるのである。かくて近時の社会的環境の逼迫と共に、それが徒らに学生を束縛することにでも終るとするならば、之は却て憂慮す

べき効果をもつようにならないとも限らないからである。教育の新体制なるものは、寧ろこれとは反対に学生をしていかに満腔の歡喜をもつて学事に努めしめ得るかという点に、その主要な目標が置かれなくてはならないのである。之が実際に今日の国家にとつて最も重要な事柄の一つであることは、言を要しないであろう。

従来の小学教育が、来年度からは国民学校に於て新たな目標のもとに行われるということに関しては、その実施方法についてなお種々の問題は存するとしても、ともかく大体に於ては時勢に適應すべく考慮することがこれによつて可能とせられるでもあろう。ところで、教育の新体制がここに発足するとするならば、之と相對應してそれ以上の教育に対する制度の革新がまたこの際に断行せられなくてはならないのであつて、之等をその儘にして置いて、単に末梢的な組織変更を企てたとしても、それで新体制なるものが実現する筈はないと考えられる。特に中等教育並びに専門教育に於て、今日深く考察しなければならぬ多くの重要な問題の存することは確かである。

先ず専門教育に関しては、現に官公立の大学や専門学校の外に多くの私立が設けられている。この中で私立の或るものに於ては、その設置の最初にあつては、それぞれ多少の特色を帯び、官公立と相並んでその存在の意味をもつようなものもあつたに違いないが、今日では既にそれらの特色も殆ど失われ、単に官公立に入学の出来ない学生を收容する場所となつてしまい、中には露骨な營利主義に陥るものもないように見える。かくて専門教育に於て私立を許可することの意味は、今は殆どどこにも見られないばかりか、寧ろその弊害の大なることを虞れなくてはならないのである。私はこの意味で、一切の私立大学や私立専門学校の廃止をこの際断行すべきであると考ええる。なぜなら、教育の如き重要事はそのすべてを国家に於て行うのが当然であると思われるからである。

ここでは、多数の私立学校の併立の結果として、現に眼に余るような種々の悪弊の醸されていくことに対して、一々は論ずるだけの余裕をもっていないが、それらは恐らく誰もが既に感じているに違いない事柄であつて、之を先ず革新することは確かに現時の急務の一つである。更に之等の多数の学校はその経営上おのずから中央都市に集

中し、無益に学生をそこに引きつけて、好ましからぬ環境を現出せしめている。特に近頃ではそれらの学生の下宿生活の困難なども問題になっているが、これも同じくその弊害の一つである。学生が勉強するには何も中央都市を選ぶ必要はないのであつて、寧ろそうでない方が却て適切であるとも見られるのであるし、また他地方から参集する学生に対しては、学校に於て適当な寄宿生活を行わしめるのがその教育の上から見て当然でもある。そうでなければ教育の眞の効果は望まれないであらう。

ところが従来に於ては、学校は単に知識を授ける場処であるかの如くに解せられ、殊に多数の私立学校に於ては、謂わゆる学問の切り売りを常態とするにさえ至つていたので、之では教育の本旨を離れること甚だ遠いと云わなくてはならない。つまり之等は、一言で云えば、教育に於ける営利主義の醸し出した悪弊である。

だから、教育の新体制は、先ず一切の学校を国家自身が経営することから発足しなくてはならないと、私は主張するのである。教育が国家の最重要事の一つであることを認識した上では、之に要する一切の費用を国家が支出すべきは当然でもあり、決して之を惜んではならないわけである。しかもそれと共に、専門教育の如きは、有用な人材を適当な方法によつて選抜し、之等に対して洩れなく施すべきである。現在のように、富裕な家庭の子弟は之を受けることができても、貧窮な人々に於てはいかに才能があろうとも之が望まれないと云うのでは、それは社会に於ける一大不合理であると共に、国家としても大きな無駄を敢てしていることになるからである。

大学や専門学校に対して、国立以外に之を許可しない例は、現にドイツなどに於て之を見ることが出来る。そればかりでなくドイツでは、大学なる名称は純粹に学問的な学科に限つて付せられてるので、例えば応用的な工学の如きに対しては、内容的にはさほど程度を異にするわけではないのに拘らず、大学の名称を与えないで、工学高等学校（テヒニツシエ・ホツホシユール）と称している。之は古来純粹な学問を特に尊重して来た伝統に依るのであるが、それはともかくも学問に対する一見識を表明していると見做してよいであらう。また之等がすべて国立

であることによつて、それらを適当に国内に分布させて比較的これらに小さな都市にも国立大学や専門学校が設けられているし、更に之等の学校の間に於て学生の自由転学が許容されている。之によつて学生は随時に随処に於て、それぞれ希望する教授の講義を聴くことができるのであるし、また卒業試験をどこの大学で受けてもよいと云う便宜さえ与えられている。之等の事柄は、おのずから教授たちの間に向上心を惹き起すと云う利益をも有つてゐるし、また一面には卒業生に於ける学閥觀念や、卒業試験に於ける席次争いなどを一掃するのにも極めて恰好な方法であると考えられる。

このような教育制度は、ぜひとも我が国にも実現せられて欲しいと我々は切に望むのである。既に我が国に於ては、学閥の弊がかなりに見られるばかりでなく、学校の卒業成績が一生付きまとうと云うような場合さえも屢々あるようである。それは一般の社会に於ける採用方法が、当人の実力如何によると云うよりは、寧ろ学校の卒業成績に依存することによつて結果するのであつて、この事によつて学校では勉強しても、卒業後はもはやそれを怠るという一般的傾向をさえ醸し出しているのである。之等はすべて今日に於て強く反省され、その匡正の道を講じなくてはならない極めて重要な事柄であると考えられる。

専門教育と共に少なからぬ改善を要するのは中等教育である。恐らく現在に於て最も不完全に行われているのは中等教育であるとさえ考えられるからである。なぜなら、中等教育は本来初等以上の普通教育として解されているものにも拘らず、現在ではそれは全く上級の専門学校への準備教育と化している観があつて、従つて上級学校への入学試験に対する合格を随一の目的として諸学科が教課せられている如くである。しかも之等の入学試験は採点の便宜を主とする上から、多くは些末な問題を取り上げてゐるので、それらに対する解答を暗記的に、注入するのが中等教育の一般的傾向となつてゐるのである。この点に關しては、入学試験問題それ自身の改良も勿論必要であるが、更に根本的には中等教育をかような試験準備から解放して、真に高度な普通教育たる本来の使命に歸らしめること

が、ぜひとも要望せられなくてはならないであろう。教育の新体制に関する極めて重要な課題は更にこの点に存するるのである。

専門教育を施すべき人材選抜の方法を適當に樹立すべきことは既に上に述べたが、この方法の如何によつては、中等教育を上級学校への準備教育から解放することが可能とせられるのに違ひないのであつて、この意味で全体の教育制度を互に相関聯して考察することの大切であるのは云う迄もない。但し中等教育は、勿論一般的な意味で専門教育への準備として見做してさし支えはないわけであるが、ここで特に指摘しているのは、中等教育の諸科目が現在のように入級学校への入学試験によつて左右されるようなことがあつてはならないと云う点である。そこに中等教育は殆ど普通教育としての独自の眼目を見失つてゐるからである。

中等教育をいかにして革新せしめ得るかと云うことに就いては、恐らく種々の方法があり得るであろうが、そこには出来る限り根本的な思考に基づいて慎重に考察されなくてはなるまい。中等教育によつて一応普通教育を完成するという見地からすれば、之を終えた人々を一旦何かの実務に就かせた上で、その中から優秀なものを選抜して、国家が上級学校への入学を命ずると云うような制度は、恐らく最も理想的な方法と見てよいであろう。之は現に陸海軍に於て一度普通の軍事教育を終えて将校に任命したもののなかから、更に或る人々を選抜して陸海軍大学及びその他で再教育を施すというのと同様である。ただ併しこの場合に於ては教育の目標が軍事に限定せられているので、事柄はよほど簡単であるが、之に反して一般の場合にはその目標が多岐多様であるし、また最初に就職した実務が必ずしもそれぞれの個人に適應しているとも限らないとすれば、之等に対する選抜方法に關して万全を期することが甚だ困難でもある。尤も之等の事柄は人事の極めて複雑なものに対する一般的な困難に外ならないので、幾らかでもよいと考えられる方法を採用するのがよいとしなくてはならないのであるから、その意味で上述の方法は確かに考察に値すると思われる。

それにしてもこの問題は必ずしも単純ではないので、なお他に種々の方法も考え得られるに違いない。例えば上述の如く一旦実務を経験することは種々の点で有益であると思われるが、他に之に代る選抜方法があり得ないわけでもないであろう。何れにしても併し現時の如く中等教育が上級学校入学のための準備教育化していることは、その甚だしい墮落であるに相違ないので、速かに之から脱却することが要望せられるのである。

要するに、教育の新体制は現在の教育制度の根本的な革新によつてのみ可能となるのであつて、種々の末梢的な組織変更の如きは、決してその本質を捉えたものではないと云うことを、ここに警告したいと思う。更にそれらの教課内容の問題については、之を他の機会に譲ることとする。(昭和十五年十月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。